

フィールドワークとデータセッションで気をつけること
：エスノメソドロジーの態度とは

フィールドワークとデータセッションで気をつけること

：エスノメソドロジーの態度とは

－第1回神戸EMCA研究会における講演記録（2014年12月20日）－

池谷 のぞみ

慶應義塾大学

nozomi.ikeya@keio.jp

■ 本講演記録について

以下の約20頁の記録は、2014年12月20日に、神戸市営地下鉄「学園都市駅」脇にある、大学共同利用施設ユニティ2階の特別会議室において開催された『第1回 神戸EMCA研究会』にて、池谷のぞみ氏によってなされた講演の記録である。

この講演の特徴は2つあると思われた。

第一に、この講演が、エスノメソドロジープロパーではない聴衆に向けられた、エスノメソドロジーの立場からのフィールドワーク論であることである。聴衆は9名だったが、そのほとんどは、看護や工学などの専門職的基盤を持つものであり、これらの専門職的基盤をもつ聴講者に向けての講演内容は珍しく、広く公開する価値があると思われた。

また、第二に、留学先から日本に帰国して活躍しているエスノメソドロジストの多くは、米国からの帰国者であり、池谷氏のように英国（指導教員は、マンチェスター大学のW.シャロック教授）のエスノメソドロジーの立場からの講演が聴けることは少ない。そういう意味でも、今回の講演内容は、活字化して広く公開する価値があるものであるように思われた。

なお、この講演に関しては、日本EMCA研究会から、研究会開催支援費の援助を頂いている。また、神戸市看護大学からは、講演会のあとに講演会に関連して行われたデータセッション部分（前半は、「認知症グループホームでの知識と記憶をめぐるコミュニケーション」＝データ提供者は榎田美雄＝、後半は「ナースステーションにおける会話のエスノメソドロジー」＝データ提供者は谷川千佳子＝）に関して、支援を頂いた。両組織からのご支援に感謝したい。（この部分のみ、榎田記）

■ 講演記録

《自己紹介、来歴》

池谷：私は今、慶應大学におりますが、5年前ぐらいまでは6年間程アメリカのパロアルト・リサーチセンターというところにいました。テクノロジーの研究者が多いと

ころなのですが、イーサーネットやマウスなど、現在コンピュータの世界で結構ななめになっている部分を研究して出してきたようなところに、社会学者としておりました。そこには、心理学の人とか、文化人類学の人もいましたが、工学系の人たちと一緒に、新しいテクノロジーを、人々の実際の生活場面や、仕事の場面にどういうふうに活かすことができるのかということ、一緒に共同研究しようというところにおりました。

パロアルトの前は東洋大学にいました。その前は、イギリスで一番エスノメソドロジーの人が集まってやっているところがマンチェスター大学というところなのですが、そこで博士号を取りました。

そこに4年間ぐらいおまして、私は厳密な意味での会話分析というよりは、フィールドワークをベースにして、人々の知識とか方法を理解して、そこからいろいろ考えるというタイプのやり方を身につけてきました。実情は「フィールドワークにこれから行くのですね。あなたなら大丈夫。常識があるから」とか言われて、ほとんど教えてはもらえなかったのですが、ほぼ毎週何らかのデータセッションをする時間がありました。シャロック先生を中心に院生が集まり、その頃は今よりもビデオは手軽に撮影できる環境になかったというのもあるとは思いますが、会話データを書き起こしたものが中心でした。観察メモの場合もありました。フィールドワークに行ってきた人が観察や気づきを提示すると、参加者はさまざまな質問をしたり、別の分析の可能性を提示したりしていきました。問題となっている場面行為をしている人にとってどんなことが前提になっているのかということをつきつめていくことで、分析の妥当な方向性や、次にフィールドで明らかにしなければならないことなどが示されていきました。その場面で行為をしている人にとってどう理解されているのか、ということに徹底的に志向した分析を目指すという中でみっちり育てられたと今にして思います。

パロアルト研究所にいたときには、対象はテクノロジー研究者が多かったのですが、フィールドワークでどのように実施し、分析するのかを、教える機会がありました。座学と併せて徒弟制度的もしくはOJT的に教えることもかなりしてきました。研究者だけではなく、SEの人たちも対象でした。当時は、システムを使う人がどういうふうに仕事をするのかを理解することが必要だという話が出てきていました。そういう意味では、私はフィールドワークのやり方を座学で教えてもらった経験はほとんどないのですけれども、教えるにあたって自分が体得してきたものは何なのかを考える機会をかなり持ってきたと思っています。

それと同時に、パロアルト研究所、パーク(PARC)とも言うのですが、そこでは研究者同士でしょっちゅうデータセッションをしていました。そのようなことを踏まえて皆さんと今日話をしていきたいと思っています。

《テーマについて》

フィールドワークとデータセッションで気をつけること
：エスノメソドロジーの態度とは

最初、樫田先生と谷川先生からいただいたお題が、「動画セッションで気をつけるべきこと」でした。そこで最初に考えたのが、動画データセッションだけではなく、「フィールドワークで気をつけるべきこと」と、「動画データセッションで気をつけるべきこと」には、相通じるものがあるということです。そこで「フィールドワークとデータセッションで気をつけること：エスノメソドロジーの態度とは」というタイトルにしました。私としてはこの動画データの分析だけをもってフィールドを理解したとはやはり言えない。それにとって変わるものでは絶対ないっていうのが、一応あります。とは言え、動画データというものをどのように捉えるのか。貴重な機会をいただいたのでそのあたりをお話しながら、少人数なのでできれば少しやりとりをしながらお話させていただければと思います。

割と医療の関係の方が今日は多いということですね。

樫田：はい。8割がた、そうです。

池谷：フィールドワークをしたのはテクノロジー開発場面が結構多かったのですが、他方で医療も救急医療を中心に病院のなかに入って研究したこともあります。メタボリックシンドロームと診断された人に対して、運動や食事のプログラムを作って実施する際の面談を分析した経験もあります。最近ではちょっとフィールドワークがやりにくくなってきてはいるのですけれども、お医者さんが自分のしていることをどう教えたらいいのかというところで、私が第三者的に、教えている場面を見たりして、例えば転院する時に転院先のお医者さんにどういうふうに情報を伝えるべきかみたいな話をやり始めています。

また最近では、病院のがん相談員の方々や国立がん研究センターの方とご一緒に、市民により確かな健康医療情報を届けていくやり方を調査に基づいて考えるということを科研で進めています。患者や家族が病気のこと意思決定をしなければならない時に、必ずしも確かな情報を十分に得られる環境にあるわけではありません。がん相談支援センターの相談支援員という方たちががん拠点病院にはいて、その病院にかかっていなくても相談をすることはできるのに、なかなか認知されていない。病院はやはり人々にとって敷居が高いようです。他方、公共図書館は敷居が低くてさまざまな人が多様な目的で行くことができる。そこで医療関係者と図書館の司書が組織の壁を超えてつながることで、医療専門家の視点も入ったより確かな情報を公共図書館で提供できるようにし、情報を得るだけでなく相談したい人を地域の相談支援センターにつないでいく、というようなことができるようにしていくために調査研究をしています。その時に、さまざまな障害を持つ方々に対する支援をどうしたらいいか、といった点からも関西でいうと堺の点字図書館の方々が進めていらっしゃる。そこに伺っているうちに実は、障がい者の方々に向けて考えるべきことが特別じゃなくなりつつある時代を迎えつつあるということにも気づきました。高齢化が進めば、何らかの障がいを持った方は増えるということで、「障がい者向け」のサービスはもはや特別ではな

くなるのだということも実感しています。

《あるデータの画像を見ながら》

池谷：これは印刷のサービスセンターでスタッフが作業している場面です (Fig.1)。普通にこれだけを見れば、この人が何かをコンピュータでオペレーションしているのだろうということはわかります。実はこの人は顧客からの注文書に基づいてジョブを始めようとしている場面を絵にしたものです。

皆さんがこの場面の動画をご覧になったときに理解できることを考えてみてください。そこで理解できることは、その人がこのような場面についてどれだけ知っているかによって大きく異なるであろうということを皆さんに想像していただきたいと思います。データセッションにはさまざまなものがあります。フィールドのことをよく分かっている人が入る場合とか、全くなにも見てきていない人が入る場合とか、もしくは対象となっているフィールドの組織に所属する、例えばこの写真に写っているスタッフの人のマネージャーが見るという場合もあり得ます。いろいろあり得るなかで動画データをどう扱うべきか、という話もあります。私たち調査者がビデオを撮る、そしてそれを何らかの形で提示する、誰かと共有するということに、どのようなスタンスでどのようなことに考慮しながら扱うべきか、分析すべきかということをお話したいと思います。

実は、この場面について少し知識があると、こうなります。本当は、公式のプロセスは、担当者が管理者の署名をもらって承認を得て初めて新しい印刷ジョブをできるということになっているのですが、実際この担当者がやっているのは、この人が担当者 A としたら、管理者の署名を待たずにジョブを開始している。見る人によっては「あらどうして」という場面でもあるんですね。でもここでは、承認を得ないで進めることが「通常」の進め方になっている。承認を行う管理者が 1 日のなかで在席していないことが頻繁にあるという状況もある。写真を見る人がどこまでフィールドのことを理解しているかで、管理者の署名を待たずにジョブを開始するという行為の理解は異なってくることになります。このことについて、この例を通してお話していきたいと思います。

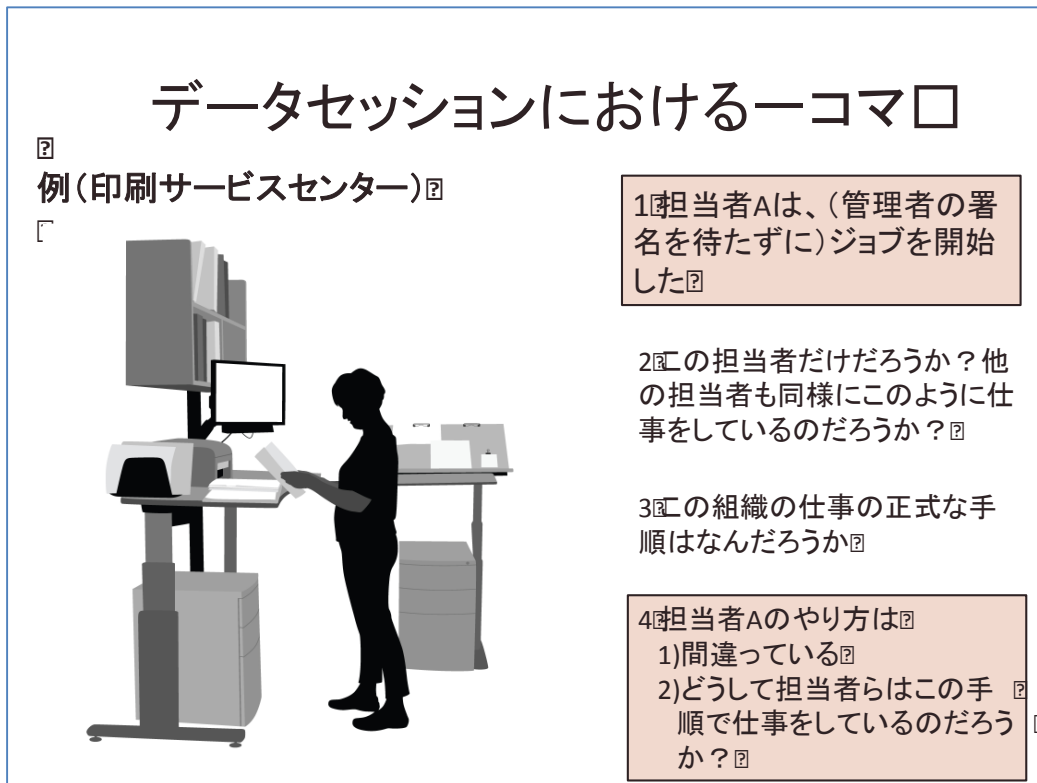


Fig.1 印刷サービスセンターでの一場面

《さまざまなデータセッションについて》

先程「データセッション」と言いましたが、さまざまな種類があります。会話をトランスクリプトにしたもののみを提示する場合や、併せて動画や録音を流すということもあり得えます。録音や録画をすることがいっさい許されていないフィールドでは、フィールドで書いたメモ、断片をもとにデータセッションをすることもあり得ます。写真というものもあり得ます。

次に、誰と行うのかというあたりもいろいろありえます。フィールドワークと一緒にいた人たちで行う。これは「ディブリーフィング(debriefing)」と呼んだりします。それぞれ複数の人数でいけば見た場所も違うし、誰に張り付いて見たかによっても違うかもしれません。自分が一番間近に見たものを、私はこの場面をこう理解したというのを提示しながら分析のポイントとなりそうなところを共有していきます。このような、フィールドワークの直後に行うデータセッションもあり得ます。

フィールドに行かなかった研究者も交えて行う場合もあります。自分たちはフィールドにある意味浸かった状況でいるときに、全く行かなかった人が「えっ、これどうしてこうなっているの」などと質問をしてくれると、答えながら自分たちもいろんなことを考えられるし、発想ができるようになっていく。という意味で、フィールドに行かなかった研究者を交えるということには十分意義があると思います。

それから少しセンシティブになっていくのですが、フィールドの構成メンバー対象と一緒に見ることもあり得ると思います。それからフィールドの組織は同じけれども、直接の対象者ではなくて別の部署や上のポジションのメンバーが見ることもあります。それからそのフィールドの専門家と言われる方々、その場面に関わる専門知識を持った研究者と一緒に見るという場合もあります。

データセッションの目的も、いろいろあるわけですが、基本的には研究者が分析を始める最初のステップとしてフィールドで起っていることへの理解を深めるためにデータセッションを行います。もう少しいろいろな場合があり得て、最近、結構流行っている感じもするのですが、フィールドのメンバーが共に場面で起きていることを共有しながら学んでいくとか、メンバーとか専門家にいろいろ考えてもらうための材料として出し実践について振り返ってもらうという場合もあります。

つまり、データセッションは大きく二つに分かれます。一つがフィールドを理解することを一義的な目的にするデータセッションと、もう一つが学習や振り返りの機会としてのデータセッションです。いずれのデータセッションを行うにしても、**フィールドに根差した場面の理解**が一番重要なわけで、そこをどう得るかは一筋縄ではないということは、お分かりの方もあると思います。特に、いろんなデータが自分の手を離れるときに、それを例えばビデオに映っている人たちの上司が見るとか、外部の専門家が見るといったときに、評価的な観点から見られる可能性も常にあるわけです。そうした場合、フィールドとの信頼関係ということも関わってきます。したがってフィールドに根差したある程度の理解とデータを一つのセットにして出すことがやはり大事になってくるでしょうし、そういう意味では1コマのデータだけで何か言うといった時の危険性であるとか、それで言えることの限界、それからそのデータをどう1人歩きさせないかという問題もあわせて考える必要があることになります。

《エスノグラフィについて》

このようにデータセッションと一口に言っても難しい部分は常にあると思います。とはいえ、今日はフィールドに根差した理解をどうデータを使いながらするのかわかるころ、特に私はエスノグラフィという、どっぷりとフィールドにいながら理解するということをしてきましたので、そういうところからお話していきます。つまり、これまで私は会話を分析することもするのですが、フィールドを理解するという一端のなかで会話を分析することを主にしてきました。そういう意味で動画のデータをどう扱うのかはフィールドワーカーがフィールドに行った時にどういう態度で理解し分析するのかと、実はほぼ同じだと私は思っています。今回はエスノメソドロジーという社会学のなかでは特定の領域なわけですが、同時にそれは実は社会科学の種々の領域を超えて応用されています。そのエスノメソドロジーにおいて、フィールドに根差した理解を得ようというときの態度ですね、特に態度の部分をはまざご

フィールドワークとデータセッションで気をつけること
: エスノメソドロジーの態度とは

紹介していきたいと思います。

「エスノグラフィとは」と言った時には、フィールドをそこにいる人たちの視点から世界を理解することを目指すもの、と言っていいと思います。そしてそれはフィールドワーク、つまりその場面におけるメンバーのいるところに身を置くことを伴うものです。同時に、書かれたもの、エスノグラフィの「グラフィ」は「書かれたもの」という意味なので、そのメンバーの視点から研究して記述したものという二つの側面があります。エスノグラフィをこのように理解した時に、エスノグラフィにおいて動画をどのように位置づけていかに使うのかということと、動画をどのように分析するのかということは重要な問いですし、両者は密接な関わりがあると思っています。

エスノグラフィの目的という点で言うと、大抵の場合にはフィールドにとっての第三者がこのフィールドにいる人たちの行為のパターンというのを明らかにすることになります。その世界のメンバーが行為についてどういう意味づけをしながら行っているのかを理解しながら記述します。

そうした記述をめざす意義として、まずは特定の状況にいるメンバーがどう自分たちの世界を理解しているのかを第三者が理解できる機会として、エスノグラフィが位置づけられるのではないかと思います。第三者と一口に言っても、いろいろあります。その場面に関わる特定領域の専門家であるとか、特にその場を統括しているマネージャーは、どのような課題があるのかなど、ある程度理解していると思われます。そうした場合でも、「実はこういうことが起きています」もしくは「課題と見なされていたことはこのように生じています」というよう形で、提示された分析がいろいろな意味を持つ可能性があります。つまり、その分野の専門家を含む第三者に対してフィールドについてあらためて深く理解すべき機会を提供する可能性もあります。さらに、技術、テクノロジーを研究開発するという立場の人にとっても意味がある可能性はあります。つまり公式の文書から得た理解に基づいた理解、つまりは「この世界の人たちはきつとこのようにするはず」という理解によってテクノロジーを作るよりも、実際のやり方や営みを具体的に理解した上で開発するというところで、随分違った物ができてくるのではないかとこのところでエスノグラフィに対する一定のニーズがあります。

スティーブ・バーレイというスタンフォードの研究者で、もともとパロアルト研究所にいた人が、講演のなかで言っていたのですが、エスノグラフィの意義は、専門家や権威者の知識を担うというのではなくて、「専門家の無知」というものを明らかにするところにある、というかなり過激な言い方をしていました。つまりバーレイによれば、その領域の専門家や権威者は、特定領域の人々にとって現実世界がどうあって、そこでどのような営みをしているのかについてわかっていなければならない人たちであるわけなのですが、往々にしてその人たちはわかっているつもりというレベルにあるということなのです。そうした状況が当てはまる場合には、エスノグラフィがそうした専門家の人たちの知識を補うという意味も十分にあり得るということになります。

それと同時に、「当たり前となっていること」を発見することが究極のエスノグラフィの目的だと思うのですが、ここでの「当たり前のこと」というのはその状況にいるメンバーの人にとっては「当たり前のこと」に相当するということです。当たり前のことがどう現象として成り立っているのか。その当たり前のことをきちんと理解することが実は、研究者が対象世界を理解したということになります。言い換えれば、その世界において当たり前のことがどう成り立っているのかを理解することがおそらくその世界を理解する一番究極のことということになるでしょう。それはかなり難しいというのが日々感じることです。したがって、ここで「発見する」と括弧付になるのはなぜかと問われれば、研究者にとっては「新しいこと」したがって一見「発見」に相当すると思われるようなことでも、理解対象とした世界のメンバーにとって当たり前のことの可能性が高いということなのです。

さらに言えば、そのフィールドの人たちにとっては全然新しくない。だから、「当たり前のことをあなたは言っているだけだ」と言われたら、実はその研究者はそのフィールドのことをかなり理解したという評価として受け取ってもいいということになります。だからそれはお褒めの言葉だと受け取るべきものという、そういうパラドクスというか難しい部分があります。ここまで到達するのが実は大変な訳ですが、そのためにもどうすればいいのか、次からエスノグラフィの心得という話をいたします。

《エスノグラフィの心得》

ここからは、みなさんにとって「そんなの知っている」という部分と、「へーそうなの」という部分と織り交ざっていると思います。先ほどのコピーの事例に戻ります。公式のプロセスが行われてないことを批判する前に、実際の業務プロセスというのがもしこの人たちにとって「普通のこと」だとしたら、その普通のことというのがどう普通のこととして起きているのかまで理解する必要があります。このギャップがどう生じているのかを理解しようとしたら、今からお話するような態度で、フィールドに出かけて行ったり、データセッションでいろんなデータを扱う必要がある、ということをお話します。

ここで六つあります。一つ一つ少しずつお話していこうと思います。

1. 「目を見開いてありのままを観察する」

ここで、皆さん初心者に戻ってお付き合いいただきたいのですが、皆さんの頭のなかには理論がたくさんあるかもしれませんが、高齢者はこういうはずとか、認知症の方はこういうふうに物事を理解するはずというステレオタイプ的な理解をお持ちのことと思います。フィールドに出かけた時には、そうした理解を使いながらも、頭から決めてかからない。何が浮き彫りになってくるかというのをじっと様子を伺う。目の前にあるものをじっくりと理解しようという態度になりましょうということです。それも速攻でわかったような気にならないようにということでもあります。何かすぐに

フィールドワークとデータセッションで気をつけること
：エスノメソドロジーの態度とは

ここで結論して「こうなんだね」とか、「ああなんだね」となると、今度別のことが起きてきたときに、その別の事を理解するときの支障になったりもします。「早く論文を書かなきゃ」とかっていう焦りもあるかもしれないのですが、そこをじっくりと踏みとどまります。

この「踏みとどまる」というのがキーワードになると思っています。フィールドワークを始める際に、この辺が大事でしょうという見当をつけられる事はあると思います。それでも「他の同じようなフィールドを見て来たからここでも絶対同じはず」と決めてかからないで、とりあえず目の前で何が起きているのか、そのことについて見極めることが非常に大事です。目の前のものがどのように成り立っているのかを理解するという事です。

さらに言えば、「フィールドのことはよくわかっているから大丈夫」という人たちが行っていることについてあらためてよく知る機会が得られるのがフィールドワークだと思います。例えば看護師の方とかソーシャルワーカーの方とかでも、研究者になろうとして院にいらっしゃることは結構あると思います。そうした方々が、もう私たち、自分の勤めているところのことはよく分かっていると思っていたとしても、フィールドワークをする機会になったら、やはりあらためてその施設に於いて看護師は患者さんをどういう点を考慮して理解し、それに基づいてケアを行っているのかを実践を見ながら理解することでわかってくることはさまざまにあるでしょう。

たとえトラブルが起きてなくても、「瑣末（さまつ）」と思われるようなことが、全部大事かもしれないと思って記録し理解の対象にすることが大事です。つまりオープンな態度を保つということです。私はもうここにしか興味がないからここしか見ないというのではなくて、常にフィールドにいるときは、もしくは動画データを見ている時には、何かが別の何かと関係している可能性は常にあるという態度で見ていくことが大事です。それで、何かを目にした場合、少なくともそれが起きたことはわかっている。何かが目の前で起きたという事実は非常に大事で、それで「こうなるはずだ」とか、「ああなるはずだ」といういろいろな理論や、括弧付の理論も含めていろいろな仮説というものを私たちはいっぱい持っていたり、新たに立てたりすることもできるわけですが、それは一旦置いておきます。そこでそのことが今起きたことを、メンバーがどういう事実として捉えているのかを理解することを優先させます。

2. 「自分のことではない」

これはフィールドワークをする時に、フィールドワークをする「あなた自身」が何を考えるかが重要ではないということです。言い換えるとフィールドワーカー自身がフィールドに関する**当事者になってはいけない**ということです。研究者として自身がさまざまな関心や、興味をたくさん持ってフィールドに行くのだと思います。だからテクノロジーを開発したいとか、看護のこういうところを改善したいとか研究者がフィールドに入って行く背景にはいろいろあるのですが、そうした関心は一旦置いて

において見ていくことをしていかなないと、結局、見るべきものを見られないという状態に自分を追い込む可能性がかなりあるということです。つまり、私は「この場面」を見ると言うて見るのですけれど、どうしてそれが起きたように起こっているのかを理解するには、周りのことをかなりわからないと理解できないのです。結局「この場面」だけを見ていたら理解しようとしたことの半分もわからないことになりかねないということです。

次に重要なのは、観察対象者の周囲の人からではなく、対象者自身から学ぶことです。例えば看護師さんがどういう仕事をするのかということを理解しようとしたときに、同僚の医師がその看護師さんたちの仕事についてどう思っているのかを聞く機会もあると思います。情報としては参考になりますし、そうしたインタビューも行うべきものですが、医師や上司の看護師長の話ばかり聞いて理解したと思っはいけないということです。あくまでも理解対象としている人たちが、何をどうやっているのか、その時にどんなことを前提としてそうしているのかを理解するというのが非常に重要です。

それから、対象者がその状況でどう感じているのかを理解することに徹することが重要なのですが、観察者がフィールドに入ることによってそれが少し難しい状況になる可能性はあります。最初は観察者の前で相手が通常よりお行儀よくふるまったりということは往々にして起こるのですが、何回か行っているとそんなことははてられなくなって、「通常の状態」に戻るはずですが。

分析ではあくまでも、研究者が何をどう認識しているかではなく、フィールドのメンバーが何をどんな時に難しいとか簡単だとかわずらわしいと思ったりするのかを理解することに徹することが求められます。その人々の感情といっても、非常に主観的なもので理解することができないとかいう懐疑論に陥らないで、私たちが社会生活のなかで、「ああ、この人今苦しんでいる」ということが分かる、つまり間主観的なレベルで仕事の大変さはその場に居合わせれば多分伝わってくるはずですが。それがどう大変なのかを、できるだけ記述できるようにする。それは感情だけを記述するのではなくて、仕事をこういうふうにはやらなければいけないからこう大変だということだけを言語化で記述するようにします。

これまでのお話は真実とか真相とかいうことを追求しようとしているように聞こえてしまっている可能性があると思います。ですが私たちは、ジャーナリストではないので、誰も知らなかったことを明らかにすることではなくて、その人たちにとって当たり前のことはどうなっているのかという、その辺りをどう理解するのかに最終的には目標があることは常に忘れてはならないと思います。

3. 「見習いになったつもりで」

観察者はフィールドに関する当事者とならないようにするには、対象者から学ぶという姿勢が重要になるということになります。「見習い」という態度で相手と接しない

フィールドワークとデータセッションで気をつけること
: エスノメソドロジーの態度とは

と、なかなか学べない、情報も得られない。だから常に「教えてください」という態度ですね。フィールドで「ベテラン」見なされているような人たちに最初はつくこと
によって学ぶことが多くなります。全てを言葉で言ってもらうことは無理なわけ
なので、何かを実践しているのを見るなかでどう自分が学ぶかという意味で、私達、フ
ィールドワーカーは「見習い」という立場にあるということになります。そこは結
構忘れがちになることでもあります。「教員」という立場で入ってしまうと、なかなか
ちょっと大変なところがあるのですが、そこを小さくして、矮小化して、「だけど私
もフィールドでは学ぶ立場なのです」ということは強調してもし過ぎることはないと思
います。

4. 「常に何かが行進しているということ意識する」

いろんな日常どのような場面、たとえ高度救急救命センターであっても「何も起き
ていない」と感じてしまいそうな時はあります。消防庁からの救急搬送依頼のホット
ラインがかかって来ないときがあって静かな時が流れることもあります。そういう何
もないということがどうあるのか。実はナースが患者をモニターし、呼ばれば、医
師も来て対応しているからこそ一見すると「静かな秩序」がある。その「静かな秩序」
がどのように成り立っているのかを理解しようと努めるわけですが、それは外から入
った者としては簡単なことではありません。一番「何も起きていない時」、ある意味何
も起きていないと外の者に思えるものほど難しいと思います。実は何かトラブルが起
きていていろんな人が「どうしよう、どうしよう」となれば、メンバー同士でさまざ
まに言語化がなされていき、身体的な動きも活発化するので、フィールドワーカーにと
っては結構いろんなことが見えてくるということが現実にはあります。

それと同時に、対象者の方が「これは僕の仕事じゃないのだけど」と言ってやっ
ていることが結構いろいろあると思います。「これは本来の仕事ではない」、「これは重要
ではないけど」と言うときでも可能な限り見ていくようにすることが大事なことがあ
ります。なぜかと言うと組織における役割分担があるなかで、それをはみ出して、そ
の人が何かを担っていることもあるかもしれませんし、何か公式に職務として与えら
れたもの以外でも自分が重要だとやっている可能性もあります。したがってその辺は
相手の言うことを鵜呑みにしないで付いて行ってみる。そのなかでいろいろ学ぶこと
もあり得るという意味では、ビデオを回す時も許されるのであれば回し続けることも
あり得ると思っています。

いつフィールドワークを終わらせるべきかをいかに判断するかという問題がありま
す。データセッションも同様ですが、これで最後というようなことを明確に決められ
る基準などはないのだと思います。ですが、この辺はかなり確固としたパターンとい
うか、「こういう場合はこういう形でメンバーは対処する」とか、「例外としてこうい
うことがあってその場合はこうなる」とある程度分かってきて、もう他のケースを見
ても変わらないというのが大体わかって来ることがあります。これを「論理的飽和」

と呼んだりしますが、そこまで到達できたらいいのだと思います。そこまでいかないとしても、ある程度はこのパターンで生じていることまでわかっているときに、フィールドの事情などでフィールドワークを続けることが叶わなくなることは常にあり得ます。論理的飽和まで到達した部分と、そこまでは到達はしていないけれども、このような物事の生じ方も見られたというレベルのものとを区別して提示することが望まれます。

5. 「得られたものを使えばよい」

フィールドに行くとき、「昨日来られればよかったのに」とか「昨日だったら忙しかったのに」と言われることがよくあります。ですが、ある意味でのフィールドワークの「いい機会」を失ったとしてもそれで終わりではないという態度でいることが重要です。逆に難しいのは、フィールドワークをしていけば分析できる以上のデータというのはすぐに溜まってしまいます。これからフィールドワークを始める方も多分それはすぐに実感されることだと思います。得られた事実から何を学べるかというのをコンスタントに考えていくのが必要です。これは私もお話ししながら耳が痛くなる話です。

6. 「わずかの情報から多くが得られる」フィールドで得られた事実はわずかだとしても、分析を進めていくときさまざまな理解を促してくれることが往々にしてあります。対象となっている方々の会話を書き留めておくと、別の時間や場所での出来事との関係が見えることがあります。さらに録音や録画をすると、素で観察していた時に比べて一段異なるレベルで詳細にいろんなことが起きていることを分析できるようになることがあります。今後この神戸 EMCA 研究会でデータセッションをされていくのだと思いますが、そのなかで実感されることだと思います。動画を詳細に見ていくと「こんなことがこんなふうには起きていたのね」ということもあります。人間が素の目で見ている時って、やはり特定のものに焦点が当たっているんで、端のところでは何か起きていることは見落としていることがあります。記憶に残っていない可能性もありえます。それをあらためて画像データがあれば、「あの人はこの次に、こういうことやっていた」ということが確認できます。在宅医療のように、身体的な動きが大事な場面では重要でしょう。何かちょっとした動きで危機に陥るということもあるでしょう。航空管制みたいに、もう1秒単位で正確に情報をやりとりすることが非常に大事な部分では、下手するとその単位で人が何をどう出したか、言ったかということが大事になるという場面もあります。そのデータをどう細かいレベルまで分析するかは、どういう分析をするのかで変わってくると思いますが、それは研究をする際、自分で決めなければならない部分だと思います。だからこれが絶対正しいというのはありません。大体この6つは非常に大事ではないかと私もあらためて今回振り返りながら感じております。

フィールドワークとデータセッションで気をつけること
: エスノメソドロジーの態度とは

《ふたたび、画像データの分析》

これで最初の話に戻るのですが、この担当者 A は管理者の署名を待たずにジョブを開始したとここで理解をするとします(Fig.1)。でもそのように理解した時点で実はジョブを開始することに関わってしなければならないことや、公式のプロセスに関する知識を前提にしてこの記述自体が成り立っているのはお分かりかと思います。つまりこれ自体すでにならかなりフィールドのメンバーの知識が入っている。それでこの担当者がたまたまそんなのだろうかとかいう疑問や、他の担当者はどういうふうに行っているのだろうか、そもそもこの組織の正式な手順とは何だったかあらためて確認することもやっていいでしょう。その後、この場面をひとしきり動画で見たとして、それで「この担当者のやり方間違っているね」と結論付けるってことも十分に可能だと思われまふ。ここのマネージャーとか、もうちょっと偉い人、ここのショップではない人が見に来たりすると、「この人は何をしているのか」という話になる可能性はあります。したがって私たち研究者とかエスノグラファーとしてはやはり担当者、この人だけではなくて他の人もここではこういうふうに行っているとしたら、どうしてこういうふうに行っているのかを追求すべき、ということになると思われまふ。先程データセッションについて、いろいろな人とデータを見せることはあり得るという話をしましたが、どうしてこの担当者はこういう手順で仕事をしているのかを提示しないで画像だけ見せたとしたら「彼女をクビにしろ」とか、どうしようもないことが起きるもしれません。

どうしてこういうことが起きているのかを理解しようとしていくと、以下のようになります。担当者は注文書に基づいて印刷作業を行っている。マネージャーは在席していることが滅多にないので、もしマネージャーが戻るのを待っていたらその一日の仕事は滞ってしまうと、担当者は認識している。その際、印刷の種類とか量によって全体としてどれくらい時間がかかるのか、担当者なりの見積もりに基づいて、「今この印刷に着手しなければ今日の仕事は滞ってしまう」というのを分かっているからこそ、承認を待たないで「勝手に進める」ことをしているということがわかってきます。

このフィールドでフィールドワークが行われる前に起きてしまったのは、スタッフが承認を得ることをシステムによって強制することでした。つまり、承認のボタンをマネージャーがクリックしなければジョブが開始できないというシステムにしてしまったのです。それによって、担当者の人たちがジョブを「勝手に」開始することが全くできなくなり、仕事が進まなくなるということが現実に起きたのです。つまり、エンジニアがシステムを作るときに、公式のプロセスに従うようにすることになったのでしょう。この話から、私たちがエスノグラフィで目指そうとしている理解というのが、もしかすると役立つ可能性もある、ということがわかっていただければ嬉しいのですが、いかがでしょうか。

■ 質疑応答

樫田：ありがとうございます。(拍手) 質問のなかに救急のデータ見せていただけるタイミングも取れるかと思えます。すごく圧縮された、1個1個に裏付けのデータに基づく、「こんなことがあってね」というのがありそうなお話なので、それを端折ってあとで振り返ったらそんなことがあったかと、30年後全部分かるというようなお話なので、自分の経験と結びつけて身に付けるというのが多分大事なので、六つ全部を身につけようと思うんじゃなく、この部分はというふうに自分の経験と結びつけている部分をご質問いただけるようなかたちで。どうぞ質疑応答、お願いします。

YYYY：YYYY です。どうもありがとうございます。なんか昔を思い出したんですけど、そんなことしてたなと思って聞いていました。ありがとうございます。最近、時々思ってるんですけど、フィールドノートを取ると割とその場で見ているものが何で、それをどのように自分が感じとって受けたかということを **description** していくので、自分が何に関心があるかとか、すごく整理ができていいツールだなと思うんですけども、最近はずっとビデオばかり使っていると、サボり癖がついているというのが、「ビデオを回しているから、いいや」みたいなところがあって、フィールドノート使わなくなっちゃうんですね。ほとんど一時期、全く書かなかった時期があって、最近はまだ一遍、反省してやり出しているんですけど、それでもやっぱりなかなかビデオデータというのがデータ量がすごく豊富なので、「データさえ取ってしまえばいいわ」みたいなところが、長撮りをする場合、特にそうですね。すると持って帰って来てからそのデータを後で見たときに一体そのどの部分を自分は見るべきかというのがよくわからないということがよくあって、これは多分学生さんなんかでもよく、何をここから研究したらいいんですかという疑問を持たれる方が多いように思うので、やっぱりその同じようなことが僕らでもあって、一体これをどのようにやっていいんだろうのかというのが一つありますね。それが多分現実的な問題としてある。

もう一つは、これは以前から気にかかっていた、今も池谷先生の話聞いていて、どうなのかなと思ったのは、自分の関心事に沿って観察とか考察を進めないで気になっていて、そんなできるかという気があるんです。まず、ほとんど今現実的に、完全な参与観察できなくてビデオを持って行ってますから、いいところが完全観察ですよ。そうすると、どうしても研究者の立場とか、観察している立場というのも明らかなわけで、だから、やっぱり向こうも、「あんた、一体何見たいの」の顔で見るし、こちらもその時に、「いや、何でもいいんです」とは言えなくて、「こんなこと見たいです」と言わないとなかなかその場に入っていけない。だから、例えば施設に行っても、「おばあちゃんの移乗場面を見たいんです」。「移乗」というのはベッドの「移乗」ですね。「ベッドの移乗場面を見たいです」と言ったら、やっとなら部屋に入らせてもらえる理由

フィールドワークとデータセッションで気をつけること
：エスノメソドロジーの態度とは

ができて、付いて行って撮ることができるけど、それがなければ、「ちょっと部屋の中をね」と言われるのが苦痛ですよ。だから、やっぱり、「ここで何をしたいんです」「こういうことを研究したいんです」と言わないと、その場の中で研究そのものがないというのがあるような気がします。ビデオデータを撮ってきて中立で何とか公平にという気持ちはあっても、なかなかそれだけじゃうまくいかない。最初の段階もそうだし、持って帰って来てもなかなかうまくいかないという、だからそういうところってあるような気がするんです。

池谷：あると思います。同感でして、やはりどこかを研究するというときには、これを見たいからと言わざるを得ないと思います。だけどケースバイケースって言っちゃったら終わりですけども、こういうことに興味はあるんですけど、オープンですみたいな言い方をしたり、ある特定の人に付いてもらって今日はこの方に付かせていただいてちょっとずっとご一緒させていただいてよろしいでしょうかみたいな感じだとその人が行くところ全部行ける、そういうやり方もあるのではないかと思います。最後ですが、「ビデオ回したら何とかなるさ」ってそれはすごいよく分かるんですけど、やはり私たちが心掛けているのはメモですね。メモ魔。自分で書くときに単にその自分が興味を持っているものだけを書くんじゃなくて、目の前で起きていること全部書くぐらいの勢いで書くことが多分大事で、それでそうするとその時は分かってなくてもあとから振り返ったときには、これとこれとこれにつながっているから大事だなとかってというのが分かってきて、この時の場面をもう一回見てみようとかいうので、ある意味、メモがインデックス代わりになるというか……

YYYY：もうすごい反省しています(笑)。フィールドノート取るのと取らないのでは大違いですよ。

池谷：やっぱりそう思われます。

YYYY：はい。取ったとき、取った日はやっぱりほんとにしんどいですよね。フィールドノート書く。でも、取った後はやっぱりそのデータ見るときに自分がそこで何をやってたかというのが記録にも残るし、自分も含めてデータにできるような感じがあって、ビデオだけ撮っているとビデオのなかに写っていることだけがデータになるというとフィールドノート取ると、そこにいた自分も含めてデータとして役に立つような感じがありますよね。

池谷：だから早くそれこそトレーニングの時にいうのは、どんなに疲れていても、その夜にとか、フィールドワーク終わった後に、まずはディブリーフィングってさっき言いましたけど、複数でいたとしたら、見たことを共有して少し話し合いをすることで、「こんなことをしてたよね」とかいうことで、「ああ、これ、ここ大事そうだね」というところが出てきます。それを次の分析とか観察に活かすとかいうことができます。次はこのことについてもエピソードとして書いてみようかっていうことにもなります。やはり記憶がある間に見たことをまとめることは大事です。だからこそ、その

時のメモがすごく大事になります。その時のメモは他の人に分からなくていいというか、ほんとに速記状態で、もう殴り書きだでもいいと思います。

YYYY：よくわかりました。

KKKK：まず、ありがとうございました。フィールドワークで得られた知見というのも、どういったかたちで他の人と共有するのかというので、例えばさっき、印刷会社の顧客を SE の人がその情報を知っていれば事前に防げたということもあったかもしれないですし、あとは実際現場とかって実際そういうのに興味ない方が多いと思うんですよ。当たり前のことです。でなかなか忙しいですし、会って話すというのも結構できないということが現場って多いと思うんですけど、どういったかたちでそういう情報っていうのを当事者とか第三者の技術者とか共有するとかあればいいんですけど。池谷：そこはすごい大きな問題で。技術者の人というか、システム開発の人は、えてしてほとんどが言葉だけで書いてあるような報告書に対して拒絶反応のようなものがある場合もあります。少しでも図などで表現されていると違うようですので、相手に応じた提示の仕方の工夫もすごく大事です。また、どういう機会に伝えるのかということも大事でそれはケースバイケースですけど、おそらく、技術者に「こうでした」と言っただけでは無理で、何かこの今の発見の技術的などところでの影響というのですか、技術との関係、開発することとの関係と結びつけて言ったらいいのだと思います。多分今のだけで、承認しないでやっているよって。忙しいから大変だと言っただけだと、SE の人はどうしたらいいんですかとなりかねないんだと思われまので、だからそういう意味ではエスノグラファーがある程度技術のことを知らなきゃいけないという話になるのかもしれないんですけど、それは常に可能なわけではないので、そうすると一緒に話し合うというか、その時の共通の言語みたいなのがおそらく大事だろうとか、そういうあたりに今私は少し関わってみたいです。

KKKK：そういう場合、技術者の人たちがそういうフィールドワークをやっている人たちからシステム開発について意見をもらうというかたちになるのでしょうか。

池谷：多分大きな組織だったらきちんとそういう機会がセットアップされてないとそれはありえないです。とても難しい。やはり組織のなかにこの手順が組み込まれていないと、「何勝手なこと言ってるんだ」という感じになる可能性があります。「ちゃんとやってあげたのに何も活かさないで」みたいな話になるでしょう。先ほどの事例のような話は多分何万回も世界のなかで起きているのだと思われまいます。だからこそ、結局使われないでそのまま放って置かれた情報システムというののもいっぱいあるんだと思います。

樫田：概ね予定の時間ですが、あと 1 件ぐらい承ろうと思います。

NNNN：ある一つのケースですけど、歩行訓練のときに、歩行訓練士さんをお願いし

フィールドワークとデータセッションで気をつけること
：エスノメソドロジーの態度とは

て、事前に何を研究しているのか知りたいから論文とかあったら送ってくださいと言われたので先に送ったんですね。当日、ビデオの撮影をする前に、挨拶をしている時に、この間の論文どうでしたかと聞いたら、テキストに書いてあるようなことしかなかったですねと言われて、それを一緒にやっている人に言ったら、先程のお話で、それでいいんだと……

池谷：間違っていないと思います……

NNNN：というふうに言われたんですけど、僕はちょっとショックで、つまり「自分たちが知っていることが書いてありました」と言われたのと、「テキストに書いてあること」と言われたのもちょっと意味が違う気がしたのが一つ。

池谷：教科書という部分に違和感を持たれたということですか。

NNNN：まあ、教科書もあるわけですし、それでお聞きしたいのはこの研究というのはある意味現場に還元するという、前提にするというか、一つの目的にすることが多いと思うんですけど、一方でさっきのスライドのところメンバーがどうやって自分たちを理解するのかを第三者つまり研究者ですよ。理解することであれば今の言われ方をして、それでよかったと思うんですけど、還元するということを考えたときに、自分たちのしてることしか出て来ないじゃないかと言われると、どうしたらいいんだろうというのがすごく。

池谷：教科書と言われるとアレですけど、ちょっと難しいと思うんですけど、多分、教科書とすると権威者ですね。権威者の人が知っている……

NNNN：教科書の話があるとは言え自分たちが。

樫田：変換の仕方が違ってただだと思いますよ。教科書に書いてあることと同じことしか書いていないと思って読めばそう読めたというだけの話なんだと思います。

池谷：そうですね。

樫田：ただそれだと、信頼獲得が難しくなるならば、キーパーソンにはもっと納得してもらおうようにプレゼンしておくということだと思いますけどね。

池谷：多分、そうだからピッチが違って、営業の方を対象とされた先ほどのご質問者もよくご存知かもしれないですけど、相手によって多分言うことは違ってくるのだと思います、教科書というと困ったなと思ったのですが、現場の人がどういう工夫をしているかというところは、やはり専門家の人はそんなに全部知っていると思わないですよ。どういうふうにどんな歩行困難を抱えている人にはこういう工夫をするという何か微に入り細に入りという部分を教科書の執筆者が全て書いているとは思えません。

他方、還元する先はそれをやっている担当者の人たちでは多分ないという気はします。ある意味、個々人の芸の領域でもあるわけですよ。だから組織のコラボレーションでどうやっているかという話も多分はあると思うのですが、その部分はもしかしてマネージャーみたいな人に教えてあげるとニュースなのだと思います。知識の

継承や育成、仕事の割り振り方を考える際の参考になると思います。当事者の人たちが自分たちのしていることを客観的に眺めてみたいという動機がある場合には、フィールドワークの成果を提示すると喜ばれるとは思いますが。でもそれは常にそういう動機があると限らないので、当事者の方に対しては、「これは教えていただいたことです。これで正しいでしょうか」という提示の仕方から始めるのがいいのではないかと思います。そこからいろいろなことが始まる可能性はあります。

NNNN：はい、わかりました。

池谷：当事者に「発見」として出すと、当事者はそれは違う、という反応になるのだと思います。

YYYY：今の観点で、ついでです。いやNNNNさんのおっしゃったことは、僕はあとで聞いただけなんですけど、知っているんですけど、他の場面を撮る時に暗黙のうちに期待されているのが、例えばその介護場面でヘルパーさんから期待されているのは、研究しているんだから素晴らしいマジックみたいな介護手法を教えてくれるんじゃないとか、そういう期待感があってこちらにしゃべってはるのがよくわかるんですよ。だから、「いやそんなことはできません。こちらが教えてもらってるんです」と常に言ってるんですけど、逆に向うの人がその研究者なんだからやはり素晴らしい何かができるんだらうというのを期待しはるといのはありますね。だからその時点で何かこちらが何か言うと、「何だそんなのいつも毎日やっていることじゃない」と言われると、「その通りです」としか言いようがないみたいなの。

池谷：多分個々のヘルパーさんの人たちには、自分の担当していることに焦点があたっているんで他のヘルパーさんがやっていることはあまり見えていないと思います。他の人たちがどうして、それらがどういう関係になっているのかについて提示することができれば、おそらくニュースであり得ると私は思うのです。実は、このセッションの人たちにはこんな苦労があって、こっちの人はこういうことをしてくれるとこっちの人がとてもありがたいはずですよという橋渡しの役とかはあり得ると思うのです。

榎田：ありがとうございます。

■ 会のまとめ

榎田：今日は第1回ということでいくと、データ分析が面白そう。でも何でも分かるわけじゃなくってデータを見てもわかんないこともあるという、なかなか辛い結論が2つとも、このデータから分かって来たかと思うので、冒頭のご講演と結びつけた形でまとめをお願いしたいと思います。よろしくをお願いします。

池谷：最初の話と結びつけて。

榎田：そうです。データセッションというには時間がなくて……

フィールドワークとデータセッションで気をつけること
：エスノメソドロジーの態度とは

池谷：でも面白かったです。あのデータ自体がかなり豊かですね。だからこのデータから何が言えるかを十分検討する余地があると思います。多分気を付けなければいけないのが、データを眺めていると私たちはだんだん推論を始めてしまうことだと思います。

池谷：結局、録音にしろ、録画にしろ、一つのデータだけで分かることはどうしても限られている。推論し始めたとしたら、それ自体が悪いわけではなくて、それを確かめるために別のデータを見たり、フィールドに戻れるのでしたら戻るというふうにするべきです。つまり、「フィールドに立ち返る」ことが必要です。メンバーにとって記憶に新しいケースだったらあれはこうだった、という話を聞けることもあるかもしれませんが。とはいえ、戻っても同じようなことがすぐには起こらないかもしれません。それ以上フィールドにおける事実に沿ったことを得られないのであれば、潔くあきらめて別のことに焦点をあてることにしたほうがいいのだと思います。

今日提示していただいたようなチーム医療のカンファレンスを分析しているとある特定のフォーマットのようなものが見えてくるものだと思います。それぞれの職種の人がどのような観点を考慮に入れて意思決定に反映させようとしているのか。その観点としてたとえば「臨床倫理の4分割法」の内容がどう関わっていて、それ以外に考慮されるものがあるのかどうか。先ほどのデータを拝見したところ、最終的な意思決定は医師が行うという姿勢が参加者の様子にあるようでした。他方、問題提起はその患者さんにより近いナースがするとフォーマットになっているような感じですね。そのあたりが面白いと思いましたし、納得がいくというか、やはり患者さんに近いところにいるのがナースであるという組織におけるメンバーの認識があるということがカンファレンスの中で見えると思いました。

他方、医師から持ちかける「4分割会議」というのはあり得るのでしょうかという辺りが、その作業仮説がいくつか出てきます。今、すぐには答えられないとしても、すでに観察した事例のなかであれば見るといいでしょう。作業仮説を立てていくなかで次に見るデータを決めていくとか、もしくはフィールドに行きます。これがエスノグラフィ的な研究の作業のサイクルであると私は認識しています。とはいえフィールドに帰れなければ仕方がないし、そうしたら手持ちの中でどこまで何が確かなこととしているのかを考える。ほぼ確定的に言えることから、暫定的にここまでは言えそうということまでバリエーションを持って提示することを意識すれば論文も書けるようになると思いました。

今日のようなディスカッションを受けてあらためてご自身でデータを見ることが出来るといいのではないのでしょうか。データセッションでは、フィールドに全く行ったことがなくても、フィールドで行われていることを評価するという態度じゃないところで臨んでくれる人がいたら、分析を進める刺激になります。そういう意味ではデータセッションを開くときにやはり最初に心得、何と言うか心構えを提示したほうがい

いかも知れませんね。今日はみなさんが理解していらっしゃるので全く問題がなかったわけですが、エスノグラフィの分析態度を共有していない方がデータセッションにいらっしゃるってことがあると思うのです。最初に「この会はこういう方針で行います、方針に沿って皆さん臨んでください」というようなことを示す必要がある場合もあるでしょう。私も過去には、データを提示したときに「この人達はなにやっているのか」というコメントを受けることもありました。フィールドの人に対しても失礼にならないように、本日申し上げたような「心得」にあるような、データを提示する際の自分の立ち位置みたいな部分も明確にする必要も場合によってはあると思います。

樫田：今日は池谷先生ありがとうございました。

池谷：こちらこそありがとうございました。(拍手)

【編集後記】

『現象と秩序』第4号をお届けします。今回は、本誌初の小特集「専門職教育における社会学」が5本の論考によって構成されています。この小特集は、昨年9月の日本社会学学会大会のテーマセッションをベースにしたものです。論争的な側面を持った論文が掲載されていると理解しております。ご意見をいただければ、幸いです。その際には、下の編集室メールアドレスの方まで、お寄せください。

次号は、2016年10月発行となります。特集の予定はありませんが、今回掲載した池谷のぞみ氏の神戸での講演を受けた、ご自身の調査に関する論考を、谷川千佳子氏（神戸市看護大学）が寄せてくれる予定になっております。「乞うご期待」です。

付記：『現象と秩序』は、国立国会図書館雑誌記事索引の対象誌に選定されています。CiNii等でも「論文単位」「論文著者単位」で検索が可能となっております。（Y.K.）

『現象と秩序』編集委員会（2015年度）

編集委員

檜田美雄（神戸市看護大学）

中塚朋子（就実大学）

堀田裕子（愛知学泉大学）

編集幹事

松下晶季（神戸市外国語大学）

坂根杏奈（神戸市外国語大学）

編集協力

村中淑子（桃山学院大学）

『現象と秩序』第4号

2016年 3月31日発行

発行所 〒651-2103

神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 檜田研究室 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074（ダイヤルイン）

e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>